2024年2月3日（土）／神戸新聞松方ホール

次世代につなぐ知見のバトン
～震災の記憶と教訓を後世に伝えるために～

2023年度の社会貢献フォーラムは、「次世代につなぐ知見のバトン」をテーマに兵庫県神戸市で開催した。2025年には阪神淡路大震災から30年を迎えるが、風化しつつあると言われる震災の記憶を次の世代にどう伝え、被害や悲劇を繰り返さないようにするにはどうしたらよいかが、いま課題となっている。約400名の参加者を前に、第一部では気象予報士の蓬莱大介さんの基調講演、第二部では震災の記憶の伝承や防災活動などに取り組んでいる4名のパネリストによるパネルディスカッションを行った。

主催：
一般社団法人パチンコ・パチスロ社会貢献機構、神戸新聞社、全国地方新聞社連合会
後援：
兵庫県、兵庫県教育委員会、神戸市、神戸市教育委員会、サンテレビジョン、ラジオ関西、共同通信社、
全日本遊技事業協同組合連合会、兵庫県遊技業協同組合

第1部　基調講演

空を見上げて～いまだから伝えたい大切なこと～

蓬莱大介さん（気象予報士・防災士）

自分たちが子どもの頃と比べて、最近の天気は少しおかしいと感じることはありませんか。1980年代に比べると、道路が冠水するレベルの土砂降りは全国で2倍、35度以上の猛暑日は、3倍以上に増えています。特に近年、災害級の大雨が頻発しております。一度に降る雨の量が観測史上1位を更新したとよく聞きますが、最近の豪雨災害を見ると、「頻発化」と「激甚化」という2つのキーワードで表わすことができます。

2018年7月豪雨では、神戸で3日間の雨量が400ミリに達し、108ヵ所で土砂崩れが発生しました。昭和13年、36年、42年と、昭和の三大水害と呼ばれる豪雨災害が起きていますが、そのときと同じレベルの雨量でした。これらはすべて、7月に起きています。神戸では7月に発生する豪雨に注意しないといけません。

災害から身を守るための対策として、天気予報を注意して見てもらいたいと思います。一番見てもらいたいのは「警報」です。昔は「注意報」と「警報」の二つでしたが、2009年から土砂災害の危険性が著しく高まったときに、「土砂災害警戒情報」が出されるようになりました。さらに2013年には、警報の基準をはるかに超えるような甚大な被害が発生する恐れがある場合に「特別警報」が発令されるようになりました。そうした警報を確認できる便利な情報サイトとして、例えば「ひょうご防災ネット」や国土交通省の「川の防災情報」、気象庁の「キキクル」などもチェックしてください。また、災害発生時には、避難情報として5段階の「警戒レベル」が発表されます。警戒レベル3は高齢者等避難、警戒レベル4は避難指示、警戒レベル5は緊急安全確保となっていますが、防災情報として、レベル3、4に特に注意してほしいと思います。

今年1月1日に、能登半島で最大震度7、マグニチュード7.6という大地震が起きました。また、マグニチュード8～9クラスの南海トラフ地震が30年以内に発生する確率が70%以上と言われています。神戸では震度6強が予想されています。私たちは、それに備えなくてはなりません。自助、共助、公助と言われますが、自分の命は自分で守るという自助が7割、近所や周りの人たちで助け合う共助が2割、そして、公の機関に助けてもらう公助が1割と思ってください。そのためにも、まずは自分が住んでいる地域にどんな自然災害のリスクがあるのか、どこに避難所があるのかなどの情報が載っている「ハザードマップ」を確認していただければと思います。

第2部　パネルディスカッション

次世代につなぐ知見のバトン～震災の記憶と教訓を後世に伝えるために～

パネリスト／蓬莱大介さん（気象予報士・防災士）、舩木伸江さん（神戸学院大学現代社会学部社会防災学科教授）、平山龍一さん（兵庫県遊技業協同組合理事長）、長沼隆之さん（神戸新聞社論説委員室副委員長）、コーディネーター／村松真貴子さん（フリーアナウンサー）

村松さん　阪神淡路大震災から29年が経ちました。今日は、あの地震でどんな体験をして、どんな教訓を得たのか、そして災害を知らない世代にそれを伝えていくためにどんな活動をしたらいいのかといったことをテーマに話し合っていきたいと思います。

平山さん　阪神淡路大震災が発生したとき、兵庫県内では約300軒のパチンコ・パチスロホールが大きな被害を受けました。まずは地域の皆さまのお役に立ちたいということで、ホールに設置した洗濯機を無料で使っていただいたり、住民の一次避難場所としてホールを開放し、炊き出し、給水、夜間パトロールを行ったり、ホール敷地内の駐車場を自衛隊の救援物資の集積基地として提供しました。また、輸血用の血液を確保するため、ホールの従業員を動員して献血をしました。平成13年には、兵庫県内の地域ボランティアや地域振興の支援を主たる目的に、「はぁ～とふるふぁんど」を立ち上げ、社会福祉貢献活動や青少年の健全育成、福祉車両の贈呈、保育園の運営事業などに取り組んでいます。

長沼さん　阪神淡路大震災のとき家は全壊し、しばらく避難所から取材活動を続けるという経験をしました。そうした体験から、住宅の耐震化、家を守るということに強くこだわって震災報道などに取り組んできました。阪神淡路大震災では、死亡者の8割は倒壊した家の下敷きになって亡くなられたと言われています。今回の能登半島地震でも、住宅の倒壊がクローズアップされていますが、同じような揺れに見舞われながら、倒壊する家としない家があるというのは、やはり耐震化の問題が大きいと思います。住宅が倒壊することで、消防車や救急車などの緊急車両が近づくことができないという事態にもなります。また、この29年間こだわってきたのが、いわゆる震災関連死や災害関連死です。この言葉が初めて話題となったのが阪神淡路大震災だったと思いますが、これからも報道を通して、災害関連死を防ぐことに力を入れたいと思っています。

舩木さん　私は阪神淡路大震災のときに、広島の高校生でした。いまは、震災の被災者たちによって2005年に発足した「語り部KOBE1995」という語り部さんの団体と一緒に活動させていただく中で、震災の体験を次の世代に伝えるために、学生たちと絵本、紙芝居、映像などの教材づくりに取り組んでいます。語り部KOBE1995では、震災の生の体験を語る活動を主に学校現場で行っています。こうした活動を通して感じることは、伝えるためには、まず体験者に話を聞かせてもらい、自分たちでしっかり学ぶことが大前提だということを学生たちも話しています。

蓬莱さん　自分の体験を語るというのは、とてもつらいことだと思います。本当はそれを忘れて次に進みたい。でも、なぜわざわざつらい経験を人に語ろうとするのかといえば、自分と同じような思いを次の世代の人にはしてほしくないからだと思います。過去の災害の記憶を風化させないためにも、被害に遭われた方の思いを引き継ぐことはすごく大切なことだと感じました。

出席者プロフィール

蓬莱大介さん 気象予報士・防災士	舩木伸江さん 神戸学院大学現代社会学部 社会防災学科教授	平山龍一さん 兵庫県遊技業協同組合 理事長	長沼隆之さん 神戸新聞社論説委員室 副委員長	村松真貴子さん フリーアナウンサー
2011年から読売テレビ気象キャスター。現在、読売テレビ「情報ライブ ミヤネ屋」「かんさい情報ネットten.」「ウェークアップ」にレギュラー出演中。	学際教育機構防災・社会貢献ユニット専任講師、2021年から現職。学校における防災教育、防災教育ツールの開発、災害経験者の語り継ぎなどの研究に取り組む。	株式会社ミリオン観光代表取締役社長。兵庫県遊技業協同組合理事長。兵庫県遊技業組合防犯協力会会長。全日本遊技業協同組合連合会理事。	編集局社会部デスク、編集局社会部デスク、編集局社会部次長兼編集委員、編集局報道部次長兼編集委員、編集局報道部部長を経て、2021年より現職。	フリーアナウンサーとしてNHKの番組を担当。現在は全国で講演、朗読活動を展開。八王子市学園都市文化ふれあい財団理事長。全国公民館連合会副会長。

長沼さん　取材を重ねていますと、被災者やその遺族の方から、毎年新しい事実を聞かされます。29年という年月が経つ間に震災経験の捉え方も変わってくるし、新しい課題も出てきます。私たちは、阪神大震災ではこういうことがあった、被災者はこういう苦労をしたということを50年後、100年後にも伝えていく責任があると思います。

平山さん　南海トラフ地震は、明日起きるかもしれません。遊技業界としましても、そうした災害が起きたときに、被災された地域の皆さんを受け入れるための態勢づくりを進めることを徹底したい。ホールで景品として防災グッズを置いたり、給水用の水をストックしたりするなどして、災害から命を守る活動に前向きに取り組んでいきたいと思っております。地域のみなさんには、震災のときにホールの駐車場などを開放するので、ぜひ活用してほしいと思います。

蓬莱さん　防災ということでは、他の場所で起こっていることを自分のこととして置き換えて考えることが大切だと思います。例えば家に閉じ込められた時に助けを呼ぶための笛などを備えておくことをおすすめします。それも防災バッグに入れておくのではなく、リビング、寝室、トイレなどに置いておいてください。笛は100円ショップなどで売っています。

舩木さん　神戸では30年前に大きな地震を経験したが、自分たちはこうして復興した、こうして立ち直ったという経験を震災を知らない次の世代に伝えていくことで、防災の原動力や被災地の希望になれるよう活動を継続していきたいと思っています。

長沼さん　来年で阪神淡路大震災から30年ですが、神戸に住んでいますと、いまも復興のプロセスの中にいると感じています。同じことを繰り返さないためにも、次の世代にどう伝えていくか、あるいはこれから災害に遭われるかもしれない他の地域の方々にどう伝えていくかというのが目下の課題です。

村松さん　阪神淡路大震災でつらい経験、悲しい経験をされた方は大勢いらっしゃると思います。ご自分の経験を話していくこと、それが災害に遭ったときにどうすればいいかという知見を伝えていくことにつながっていくのではないかと思います。災害をなくすことはできませんが、私たちが積み重ねた知識を伝えることで、被害を減らすことはできます。かけがえのない命を守るため、自分の命を守るため、世代を超えて語り継いでいくことが大事だと思います。

業界が地域社会と共生していくために今後も社会貢献活動の継続が重要

兵庫県遊技業協同組合理事長　平山龍一さん

重要なのは社会貢献への意識改革であり、地域とのつながりや地域貢献活動は、遊技業界の発展にとって必要不可欠です。そのためにも、ボランティア、リスクマネジメント、減災のための工夫などの活動を通じ、社会に貢献していきたいと思います。今後も兵遊協の精神である「団結と地域社会との融和」を胸に刻み、青少年の健全育成、障がい者支援、子ども福祉などの活動を行う団体を継続的に支援していきたいと考えています。